ニューズレター
２０１３年5月
第１３号

てんとうむし

【子どもセンター　てんぽ事務局】
〒222-0033　横浜市港北区新横浜2-4-6 新横浜法律事務所内
TEL:045-473-1959　FAX:045-477-5822

「あしながおじさん再読中」

理　事　　東　　玲　　子

はやりの電子書籍を手に入れました。無料コンテンツがたくさんあるので、やさしい英語の多読をしてみよう！と似合わぬ向上心をもってしまい、DADDY　LONG　LEGS（あしながおじさん、です。）を読み始めました。

まず最初に驚いたのは、原書はDADDY（お父さん）だったこと。

主人公のジェルーシャは、孤児院（２０世紀前半のお話だと思うので、「孤児院」とします。）の院長先生から、大学に進学させてもらう代わりに、援助をしてくださる理事様に宛てて、毎月1通、親に書くような手紙を送るように指示されました。大学の寮に入った初日の手紙はちょっと緊張気味に「孤児を大学に進学させてくださった親切な理事様」宛でした。しかし、ひとり部屋を使い（今までは20人部屋だったのに！）、お仕着せや寄付ではない自分の服を着て、気の合う友達ができ、「普通」の世界のいろいろなことに驚き、喜び、２通目からは、本当の家族のように思えると言って「DADDY」と呼びかけるようになります。「おじさま」という和訳は、ジェルーシャの気持ちよりも冷静な感じです。院長先生は、ジェルーシャに向かって、働かねばならない子がほとんどなので、進学させてもらえるあなたは本当に恵まれている、理事様に感謝するように、と諭します。

このくだりを読みながら、てんぽに滞在した子ども達の顔を思い出しました。親から逃げるのに必死でプチ家出を繰り返して出席日数が不足し、心も体も疲れ果てて学習意欲も失せており、退学を選択した子がいました。本当は進学したいのに就職を選択した子がいましたが、社会人入学までの道のりは険しそうです。複数の奨学金をもらって大学に進学したものの、生活費のために休む暇なくアルバイトをし、次年度も奨学金をもらうために必死で勉強し、過労で倒れた子がいました。親に頼れない子は「働かなければならない子がほとんど」という実情は、ジェルーシャの時代と変わりが無いようです。学びたいと望む子が、学び続けられるような、学び直せるような時代はいつになったら実現できるのでしょうか。

こんな風に考えながら読んでいたのですが、はたと我に返りました。私は、子どものときとは違う読み方をしている！

「おじさんはどんな人かな」「ジェルーシャはこの次はどんな発見をするのかな」とわくわくしながら読んだはずなのに、その感覚を忘れてしまったことは、とても残念なことです。そして、てんぽに滞在する子ども達と向き合うとき、彼らの物の見方、感じ方に寄り添っているだろうか、豊かな人生経験に裏付けられた（…と思い込みがちな）私の考え方を押しつけていないだろうか、と自分を振り返っています。乏しい英語力のおかげで、ジェルーシャはまだ1年生です。卒業までの3年分、子どもの頃のわくわく感を思い出しながら、ゆっくりと読み直したいと思います。

ボランティア研修

久里浜少年院に伺って

ボランティア　野中

久里浜駅からバスにゆられて暫く行くと、海のすぐそばに久里浜少年院はありました。高い塀に囲まれた中にあるものと思い込んでいたのですが、予想に反して海につき出た開けた場所にありました。院庭に数段の階段がある小高いところがありましたが、それは昔の島だとか。

私たちが訪ねた日は、院長がいらっしゃり、直にお話を伺うことができました。

「少年院では、一人ひとりの個性、長所、非行の傾向などに応じた矯正教育を行う場所で、久里浜少年院は、特に個別的な生活指導が必要とされる少年の他、日本語によるコミュニケーションが困難な外国人少年、少年院収容受刑者を対象としている。」とのこと。

価値観変容講座や社会適応講座等と共に茶道、職業、OAKLAND、農業等の学びもあり、高校卒業認定の制度があるとのことでした。更生保護就労支援モデル事業として、就労支援も行われているが、就労先が決まって帰った子はほとんどいない…予想はしていたものの、現実の厳しさを突きつけられた想いでした。

今ひとつ心に強く残ったのは、行き先の問題です。親元に帰る人が一番多いのですが、どこからも引き取り手がなく、一泊のホテル代を貰って社会に戻る子どもがいることを聞き、行き着く先が見えているようで考えさせられてしまいました。家庭に問題があり、その上社会の中にも子どもたちの居場所が無い。そういう状況の中で生きていくことの困難さや孤独を思いました。

この日はバレーボール大会が行われていました。大会というと声援が飛び交い、賑やかに盛り上がっている様子を思い浮かべるのですが、対戦するチームのみ体育館に集まり、試合をしていました。それでもボールを追いかける少年たちは、楽しそうに見受けました。規則に縛られた生活の中で、つかの間の寛ぎの一時なのかもしれません。,

院での生活の様子をDVDで見せていただきましたが、その中で「自分は母のことが大好きと言うことは変わらない」「意味ないと思うこと、出来事に大切なものがある。」という少年たちの言葉が重く迫ってきます。「挨拶の瞬間、今日も一日自分との闘いが始まる」という冒頭の言葉がありましたが、自分との闘い、社会生活の中で一市民として生きていける自分作りを・・・と願いながら少年院を後にしました。

よろしくおねがいします♪

子どもセンター てんぽ　ホーム長　二井内勝昭

平成２５年１月７日付けで、「子どもセンター　てんぽ」の「ホーム長」として着任いたしました、二井内勝昭です。児童相談所の経験はそれなりにあり、また、児童福祉施設の経験もこれまたそれなりにあるのですが・・・義務教育終了から２０歳までの少年を対象とする「子どもセンターてんぽ」のような仕事は全くといっていいほど経験がありません。「お話」を伺った時の私の正直な気持ちを申せば「えらいことになったな」でした。

私が何十年か前の現職のころの児童福祉の「対象年齢」は、「義務教育」年齢より下の子ども達であり、現在の「子どもセンターてんぽ」が対象とする年齢の少年は、「気になりながらも」かなり放っておかれていました。今から思えば、「やりようがなかった」と言い訳しながらも、「申し訳なかったな」という思いにかられるところです。

「ホーム長」として、はたして「私に何が出来るのか」という強い思いで、着任する前に一度施設の見学をお願いしました。

「こんにちは！」と挨拶をし、多少ビクつきながら、建物の中にはいりました。　そこには「親元に帰れない」二人の少年がいました。印象としては、「おとなしいなー」と感じました。この少年たちの姿が、「このホーム」が持っている空気かな？と納得しかかったときに、続いて現れた職員のみなさんの声は、それをひっくり返すくらいの明るく大きな声でした。　その声は、いかにも、このスタッフの方々に、この少年たちはささえられ、「新しい未来作りに励んでいるんだ」という思いを強く持つことができるものでした、と、同時に、私もこのスタッフに支えてもらい、「老骨に鞭をうってみようか」と思えるものでした。

毎日のように、テレビに新聞に少年の事件が載っています。まだまだ少年たちを真剣に支える社会の手は必要で、その重要性は日ごとに高まっているように思います。

「少年達に明るい未来を！」と願い、熱き思いで「てんぽ」を立ち上げられた弁護士さんの活動、そして５年もの長き期間を継続し、運営してこられた「てんぽ」の関係者の皆様の気持ちに、湧き上がってきた「私の思い」を加えさせていただきます。

どうぞ、皆さんよろしくお願いいたします。

日本子ども虐待防止学会に参加して

２０１２年12月7日～12月8日にかけて、高知で「日本子ども虐待防止学会」が開かれ参加したスタッフが感想を寄せてくれました。

町全体が「坂本龍馬」の雰囲気の中、一日目は高知城の近くの会場で「子どもと社会的排除」、二日目は県立大学内で「社会的養護の子どもの“シビアな生い立ち”に心理職はどう向き合うか？」に参加しました。それらは、子どもの現状を踏まえて専門的に研究がされています。心理職は子どものライフストーリーワーク（ＬＳＷ）を作りながら子どもの記憶の整理をしていき、それが子ども自身の回復につながることから、聴くときのタイミングや姿勢の重要性についての発表でした。虐待体験に触れることは賛否を呼びますが、聴いてほしいと思う子どもの気持ちに聴く側の大人は真摯に向き合うことを今更ながら確認したシンポジウムでした。（シェルタスタッフ）

参加者数は二千余人，多くの人と会場を目の当たりにしました。圧倒され少し傍観してしまいました。多種多様な発表や紹介のどれも興味深くありました。その中でもより賑わっていた印象があるのは、「地域」や「連携」というキーワードがあるものでした。各自治体の特色やその具体例などの情報交換が活発な印象を持ちました。私は高知県を初めて訪れ、坂本龍馬を改めて知るきっかけも得ました。彼のように「なんとかしよう」と人々と関わり、より良い日々を迎えようという姿勢にも刺激を受けました。そしてここに集う方々に重なる印象も持ちました。私もみずきの家の一員として地域の中で一役を担っていきたいと、意識を高めるられた経験をさせて頂きました。
（みずきの家支援員　青柳）

みずきの風

今，みずきの家に「巣立ちの風」が吹いています。入居して三ヶ月余りの利用者が二月末日で退去しました。ここの雰囲気に慣れず辛い日々を過ごしていたので，近くに住む親族の家に引き取られたのは，それはそれでよかったのでしょう。ホームから会社に通った日々を忘れずに。
三月半ばに退去した利用者は無事に高校を卒業して，これからは観光ホテルで仕事をしながら専門学校に通います。楽しくも大変な日々が待っていますが，二年間を大事に過ごして下さい。比較的近場なので，時々励ましに行きます。
三人目は五月の退去を予定しています。まじめな仕事ぶりで会社の評判は良好ですが，他者との関係に悩んで時々「“もう嫌だ”の虫」が騒ぎ出します。頭では理解しているのに気持ちはゴチャゴチャ。どうにもならずムシャクシャして物に当たると大きな音が出ます。仕事の評価に自信が持てると安心しますよ。
そして，四人目は六月の退去が目標です。入居して二年が過ぎましたが，その間いろいろな事がありました。長かったような短かったような…時間でした。仕事に向き合う姿勢は折り紙つき…正社員になれて本当に良かったね。
いろいろな風が吹くみずきに居て，揺れ動き混ざりゆく感情に心ざわめく「巣立ちの風」をしみじみと感じています。（加藤さい・利明）

「子どもセンター てんぽ」を利用して⑨
～ケースワーカーの視点から～

ある日の午前、私は、行き場をなくしたお子さん（Aさん）の担当者としてててんぽの入所面接に立ち会っていました。お子さんと一緒に不安と緊張の中で臨んだ面接の後、「受け入れOK」というお返事をいただいた時には、Aさん以上に私がホッとしていたように思います。その後、てんぽに伺うたびに心を動かされたのは、Aさんの希望を、まず「どうすれば叶えられるか」という視点で受け止め、実現方法を一緒に考えてくれる弁護士さんやスタッフさんの熱心さでした。とかく施設や支援者は“実現する方法”よりも“実現できない理由”に注目しがちな中で、このようなてんぽの支援は、実は非常に難しく、稀有なことなのです。

本来、子どもは家庭で安心して過ごせることが理想だとすれば、子どもにとってシェルターは“パーフェクト”な居場所にはなり得ないのかもしれません。しかし、入所当初の“固い”顔つきから、自然な笑顔が垣間見られ、わがままや文句さえ言えるまでに“感情表現の豊かさ”を取り戻していったAさんの変化は、てんぽという存在の大きさ、有難さを実感するのに十分なものでした。

困難に立ち向かうAさんの姿と、てんぽの支援に、私自身も大変学ばせていただいた支援の体験でした。今後、Aさんはもちろん、すべての子どもが幸せな生活を送れるようになることを祈らずにはいられません。（児童相談所・ケースワーカーA）

子どもの家から

利用者Ａさんが「今まで我慢してきたのに…」と言って泣き崩れました。これは次の施設に移るまでの期間が延期される事が分かった時の様子です。それまでAさんは『明るくておしゃべり』という印象が強い子でした。

てんぽに入って来る子ども達の多くは劣悪な環境の中を必死に生きてきました。てんぽに入りやっと誰らかも傷付けられない場所で心と体を休めることができます。しかし、しばらく経つと同年代の子の生活がうらやましく思えてきます。友達と遊びたい、携帯電話を自由に使いたい…それはごく当たり前の感情だと思います。Aさんもそのような思いをグッと我慢してきたのでしょう。いつもの明るさからは全く想像できない程の悲しい顔をしていました。私はこの時、子どもの表面に表れているのは氷山の一角に過ぎないと感じました。きっと心の奥では私が想像を絶するほどの痛みや悲しみ、怒りがあるのではないかと思います。そんな彼女に私ができる事と言ったら、一緒にくだらない話をして笑ったり、小姑のように「部屋ちゃんと片づけたの？」と注意したりするくらいです。

そんなAさんも旅立ちました。希望に満ち溢れている一方、不安も大きかったとは思います。次の居場所で充実した日々が過ごせるようにてんぽからそっとエールを送り続けます。（スタッフ）

～みずきの家からのお願い～

＜その１＞　　学習ボランティア募集！

元利用者が高校検定を受けるための勉強を始めます。そこで，ＬＡＰの事業として週１～２回の学習室を開いて応援したいと思います。１８歳の女子１名を対象に，高校検定の内容を教えていただけるボランティアを探していますので，いらっしゃいましたらみずきの家（０４６５－４３－８３０２）までご連絡ください。

（内容）　週１～２回，午後７時から約１時間３０分程度，教科は数学，英語，理科等で一教科だけでもかまいません。場所はみずきの家（南足柄市生駒７５番地）の地域交流室を考えています。

＜その２＞　　布団・枕の寄付募集！！

新しい利用者のために，布団や枕を準備しておきたいと思います。ご家庭で使用していない布団・枕で，クリーニング等が必要無い清潔な物（できれば新品）がありましたらご寄付をお願いします。

今後とも皆様のご支援を心よりお願い申し上げます。

《ご協力のお願い》

てんぽは，会員のみなさまの入会金・年会費とご寄付等に支えられて運営しています。ご協力をお願いします。

正会員　　入会金5,000円，年会費5,000円
賛助会員　入会金3,000円，年会費3,000円（1口）
寄付　　金額の多少に関わらず，大歓迎です☆

【振込口座】

・三菱東京UFJ銀行　新横浜支店
　普通預金　口座番号　０３５０５１３
　「特定非営利活動法人　子どもセンターてんぽ
　　理事　影山秀人」
・日本郵政公社
　口座記号番号　００２６０－８－１３３４０８
　特定非営利活動法人子どもセンター　てんぽ

【定時総会・イベントのお知らせ】

第７回定時総会及び６周年記念イベントを，下記の日程及び場所で行います。

皆様，お誘い合わせの上，ぜひご参加ください。

日時：５月２５日（土）午後
場所：相模原市立あじさい会館
（ＪＲ相模原駅からバス10分，
もしくは小田急線相模大野駅から
バス30分）

【編集後記】

皆様のおかげで、このてんとうむしも７年目に突入しました！！当初は４頁だったものも６頁と情報が増え、皆様に少しでもてんぽの様子をお伝えできたらという気持ちでここまできました。

毎回、どんな記事が良いかなぁ、どんな記事があるかなぁと苦慮しておりますが（苦笑）

これまでご協力をくださいました皆様に、この場を借りて改めましてお礼を申し上げます。ありがとうございました。また、今後も充実した情報を皆様にお届けできるように頑張りますので、これからもご協力及び忌憚のないご意見をいただけますととっても嬉しい限りです。（野口）

「てんとうむし」は特定非営利活動法人子どもセンターてんぽ事務局が，責任を持って編集・発行しております。本誌に関するご意見等ございましたら，下記までご連絡頂きますようお願い申し上げます。（無断転載はご遠慮下さい。）

【子どもセンター　てんぽ事務局】
〒２２２－００３３
横浜市港北区新横浜２－４－６
新横浜法律事務所内
TEL：０４５-４７３-１９５９
FAX：０４５-４７７-５８２２
E-mail：info@tempo-kanagawa.org
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ：http://www.tempo-kanagawa.org/

２０１３年５月発行